

防人の詩

2479

京都師範空襲

(101)

銃後編

た本科一年、吉岡時夫君(七も)手記のなかで――

京都師範本科一年、阪原幸夫君(七も)は、いつも克明な日記をつけていた。舞鶴大空襲のあった七月三十日の日記にも、その模様が詳しく記されている。それによると――

「七月三十日 晴 (この日は)午前四時半ごろに空襲警報が発令された。そして、飯を食う間もないぐらい、一日に十一回の空襲警報が発令された。初めてのことで、警報の出されるたびに防空壕(こう)に退避した。その壕内には、しずくが落ちてくるので寒かった。久保君の死がいをも何とも処置してくれないので、一日中一緒にいた」

ここに言う「久保君の死がい」とは前日の二十九日の空襲で爆死した学友の久保文雄君(七も)の遺体のことであった。このことでは同じように学徒動員で海軍工廠にきてい

出ると、時刻はもう夕方となっていた」

このようにして爆撃に倒れた学友の遺体を守って、さらには次の日の空襲にも耐えていた京都師範の動員学徒隊であったが、彼らの級友の一人、本科一年の溝口宏君(七も)はこの日の大空襲の下にも防空壕に入らず、空爆下の舞鶴湾の惨状を目にするという稀有(けう)の体験下にあった。

溝口君は――

「それは、防空壕に入らなかつたのでなく、入れなかつたというのが正確な状況であった。それまでの空襲警報の発令をみたときなど、きちんと防空壕への待避をくり返していた。ところが、この日にかぎって壕に入ることができなかつた。自分が作業場の第二砲壙(こう)工場からの退避命令で逃げ込んだところは水交社前の竹藪(やぶ)の中だった」

「竹藪といっても竹林状の密生地帯ではなかつた。茂みというほどのところではないため、上空に飛来した敵機編隊から発見される危険もあった。自分分は、ともかくこの竹藪の中で身を固くしていた。そのとき、敵機編隊の第一波なのか、三十機ほどの編隊が舞鶴湾に急降下するのを見た」

「編隊は湾上での旋回をくり返した後の急降下であった。激しい迎撃の砲火音と爆弾の炸(さく)裂音が自分の全身をゆさぶるのを感じた。自分は一層に身を固くして竹藪

の中に伏せていた。その耳もとにバリッ、バリッという連続音を聞いた。敵艦戦機からの機銃掃射音であった」

「自分は地面にしがみついていた。そして「神さま、お母さん」と声にならない声をあげていた。それから後に、どのようにしていたか、はつきりとした記憶はない。ただ頭上の機影と爆音が消えたので自分を取り戻した。同時に視線を舞鶴湾に注ぐと、そこには二本の太い火柱が望まれた。艦が炎上しているのだった。この二本の火柱は何か、噴火口からの火勢が噴き出すのと同じように真っ赤な色で艦を包み込んでいた」

(編集委員 久津間保治)

- ▼阪原幸夫君(京都市西京区桂千代原町三八ノ八 元平沢小学校校長)▼吉岡時夫君(京都府竹野郡弥栄町木橋 元吉原小学校校長)▼溝口宏君(京都府長岡京市神足一ノ五ノ四 成基学園講師)

旧舞鶴海軍工廠 (舞鶴在住・押見直義氏提供)

